山茶花

佐左木俊郎

平三爺は、病気で腰が痛むと言って、顔を顰(しか)めたり、自分で調合した薬を嚥(の)んだりしていたのであったが、それでも、山の畠に、陸稲(おかぼ)の落ち穂を拾いに行くのだと言って、嫁のおもんが制(と)めたにもかかわらず、土間の片隅からふごを取って、曲がりかけた腰をたたいたりしながら、戸外へ出て行った。

「落ち穂なんか、孩子(わらし)どもに拾わせたっていいのだから、無理しねえで、休んでればいいんですのに、爺(じん)つあんは……」とおもんは繰り返した。

「ほんでもな、ああして置くとみんな雀に喰(か)ってしまう。一かたまりの雀おりっと、いっぺんにはあ、一度

団子して食う分ぐらい、わげなく喰(か)れでしまうがらな。——まあ、なんぼでも拾って来んべで。孩子(わらし)どもだのなんのって言ってっと、まだはあ、長びく原因(もと)で、去年のように、拾わねえうぢに、みんな雀に喰(か)ってしまうがら……」

併し平三爺は、そのまますぐに出掛けて行くのでは無かった。——祖先から承(う)け継(つ)いだ財産を、自分の代に、ほとんど無くしてしまったので、爺は、伜(せがれ)への憂慮から、働き続けよう、働き続けようと努力しているのではあるが、しかし、身体(からだ)の方も大分まいっているのだし、気持ちの上では、より以上に休息を需(もと)めてい

るのであった。

　殊に今は、疝気（せんき）を起こしているのだから、爺は、仕事への倦怠と、伜への憂慮との、この二つの間にもだもだしているのである。それで爺は先ず、大きなごつごつの手を両方とも、曲がりかけた腰の上に置いて、浅い霜が溶けてぴしゃぴしゃと湿っている庭を、真直ぐに山茶花（さざんか）の木の下へやって行った。

「おもん。一枝（ひとえだ）、婆あの位牌（いはい）さあげて呉（け）ろ。」

爺は、そんなことを言いながら、しばらく山茶花（さざんか）の木の下で、うろうろしていた。

　伜の長作は、その時、納屋（なや）で稲を扱（こ）いでいたのであっ

たが、父親が、おもんが制(と)めるのを肯(き)かずに出て行ったらしい気配なので、世間体(せけんてい)などを考え、どうしても引き止めなければならないと思って庭へ出て来た。

「爺(じん)つぁん。そんな無理なごとしねえで、少し休んだらよがあめんがな?」と長作は、やや語調を強めて言った。

「無理ってほどでもねえげっと……拾わねえうぢに、みんな、雀に喰(か)ってしまうべと思ってや。せっかくとったの……」

「落ち穂ぐれえ喰(か)ったって。――そんより、医者さでも掛かるようになったら、なんぼ損だかわかんねえべ

ちゃ、爺つぁんはあ！」
「うむ。それもそうだな、ほんじゃ、おら、今日は、休ませてもらうべかな。」
爺は、眼のあたりを少し赤くするようにして、息苦しい呼吸の間から、申しわけでもするように、吐切れとぎれに言った。そして、また腰をたたいたり、何か言い残したことがあると言うように、口をもぐもぐさせながら、とつおいつ山茶花を眺めていて、容易に家の中に這入ろうとはしないのであった。
「なあ長作。この山茶花は、ふんとにいい花、咲くちゃなあ！」

「…………」
長作は、爺の方を、白眼で、ちらりと見たきり、なんとも答えずに、腰から煙草入れを抜き取って、煙草に火をつけた。
爺は、ひどく間の悪さを感じた。そこで、足もとへ唾（つば）をして、それから山茶花のまわりを一巡した。
「なんて言ったたって、こんだけの山茶花、この界隈（かいわい）に無（ね）えがら……」
「山茶花など、どうだって……それより、早ぐ寝で休んだらいいかんべな、爺つぁんは。」
長作は、煙草の煙を吐きながら、また、爺の方へ横

目を遣った。そして、そこには重々しい雰囲気（ふんいき）が醸（かも）し出された。

爺は、倅の気持ちを繕（つくろ）うようなことを、何か言い出そうとして、口を二三度動かしたが、ただ、口を動かし得たに過ぎなかった。さらに爺は、この山茶花を売って、いくらでも生計（くらし）のたしにしたら……こう言おうと思ったが、それも思っただけで、口に出す前に、倅が、どういう返事をするかが気になった。

「この忙しい収穫期（とりいれどき）、休んだりして……」爺は申しわけのように呟（つぶや）きながら家の中へ這入って行った。

「稼いだって、それ以上に損するようなごっちゃ、な

んにもなんねえがら……　まあ、ゆっくり休ませえ。」

　長作は、爺の後に跟いて家の中へ這入りながら、こんなことを言った。この言い草は、すでに、爺は幾度も幾度も繰り返して聞かされた。それで爺は、今では、若い時分、自分が屈指の稼人だった自慢はもう決してしなくなったのである。

　平三爺は、事実、村でも屈指の稼人であった。また、非常なお人よしでもあった。そして爺は、よく他人から騙された。取引をすると、きっと、損をした。他人の借金の保証人になっては、借り主の代わりに払わさ

れたことも度々あった。そんなわけで、爺は、他人よりも余計働いたにもかかわらず、親から承（う）け継（つ）いだ財産まで、すっかり無くしてしまった。

そのことを気にしているために、爺は、折々、伜までが自分から離れて行ったように思って、非常に寂しい気持ちになることがあった。その思いは、年を重ねるに従って、だんだん強くなって行った。伜夫婦は、何かにつけて優しくしてくれるのだが、それをさえ、爺は、その底の方に、何かしら意地の悪いものがあるように感ずることがあった。伜に戸主を譲って、一時、ほっとした気持ちになった爺は、また根（こん）をつめて働き

出した。伜は、財産の少ないのを、自分が無くしたのを、面白くなく思っているのに相違ねえ。いくらでも、この穴を埋めてやらねばならないと思ったからであった。

併し、伜の長作は、決して親の意をないがしろにするようなことはなかった。世間への体裁（ていさい）からばかりでなく、実際に、六十の坂を越してから、なお、働き続けねばならない自分の親を、彼は心の底から気の毒に思って、出来るだけの慰撫（いぶ）を心掛けているのであったが、なぜか長作は、それを露骨に現すことは出来なかったし、そういう言葉を口にすることは、なおさら出来

ない性分だった。ばかりでなく、爺があまり馬鹿馬鹿しい苦労などをする時には、むしろ、罵りに近い言葉で制めることがあった。

平三爺は、他所の年寄り達などに比べると、自分が、非常にいたわられているということを知っていながら、伜の心の底に、意地の悪いものがあるように感じた時や、罵りに近い言葉を受けた時には、やはり、非常に寂しい気持ちになった。爺が、山茶花を大切にし、それに自分の慰めを繋ぐようになったのは、それからのことであった。その山茶花は、まだ相当にやっていた頃に、婆さんの植えたものであったが、平三爺の、長

い労苦の生涯に、慰めのものとして残ったのは、僅かに、この一本の山茶花に過ぎなかった。この一本の山茶花のほかの何ものをも残し得なかった生涯、六十何年間の、血のにじむような、労苦に満ちた人生だったとも言えるのである。

重苦しい雰囲気の中で、三人は黙り続けていたが、長作は煙草入れを腰にさして炉傍（ろばた）を立った。

「爺（じん）つぁんの、薬さ混（ま）ぜる砂糖、万の野郎が、みんな舐（な）めでしまって無くなったげっとも……」と、おもんは、相談するように言った。

「砂糖なんかいらねえぜ、おら。薬だもの、嚥（の）み辛（づら）い

のなんか、仕方がねえ。」

「卵が、なんぼか溜まってる筈だべちゃ。そいつでも売らせてや。うむ、万の野郎に売らせで。」

長作はこう言い残して、また納屋の方へ出て行った。

平三爺は、重い溜め息を一つ吐いて、幾日も敷き続けられてある万年床へと立って行った。おもんも跟いて行って、破れて綿のはみ出ている布団を掩い掛けてやるのであった。そしてなお、上から押し付けたり、その辺に脱ぎ捨てられている衣類を、なんでも、手当たり次第に掩い掛けてやるのであった。

「もう沢山だ。おもん、こんで沢山だ。」
「ほんじゃ、ゆっくり休ませえ。薬も拵えで置ぎしから。」

　おもんはこう、水洟をすりながら言って、台所へ戻った。これから、彼女も稲を扱かなければならなかったのだ。

　平三爺が、床にもぐり込んでから間もなく、町の操三郎という男がやって来た。以前、鉈や鎌などを売りに、この村へ出入りしていたが、それから三四年姿を見せずにいて、最近また、稲扱き機械を売りに歩き廻っていた。操三郎は、永いあいだ目をつけていた長

作の家の山茶花を、この前に来た時は、売れと言っていたが、今日は、稲扱き機械と取り換えてくれるようにと言って、執拗（しつよう）に頼むのであった。

「駄目だ！　機械は、ほしいにあ、ほしいが、この木は、爺（じん）つあまの……」と長作は、同じことを繰り返した。

「ほだから、まず、爺つあまに訊いてみせえ。」

「駄目だったら、爺つあまが、今、病気だし、この木は、大切にしてんのだから。」

「ほんじゃ、爺つあまに、おれ、直接（ずか）に、訊いで見んべかなあ？」

操三郎は、山茶花の樹の下から、平三爺の寝ている部屋の前の方へ歩いて行った。長作は、手をかけてまで引き止めるわけに行かないので、ただ、その男の後に跟（つ）いて行った。長作にしては、その一本の山茶花よりも、稲扱き機械の方を欲しいのは勿論だった。しかし長作は、父親の気持ちをないがしろにしてまでは望み得なかった。

「此方（こっつ）の家の爺つあま。病気はどうでがす？」

平三爺は、なんとなく、聞き覚えのある声のように思って、寝床の上に腹這いになった。

「ね、此方（こっつ）の家の爺つあま。――」と操三郎は、縁側

へ長くなり、顔を障子の側まで持って行った。その二度目の声で、平三爺は、稲扱き機械を売って歩く、町の操三郎だということがわかった。

「爺つぁん！」と長作が、そこの障子を開けた。

「ね、此方の家の爺つぁま。」操三郎は縁側へ腹這いになって、平三爺に話しかけた。「機械一台ど、どうでえす？　あの山茶花の樹ど、取（と）っ換（け）えまえんか？」

「それさな？……」

平三爺は、口をもぐもぐと動かしながら、げっそりと肉の落ちた面を伏せて考え込むようにした。そして、やがてまたその窶（やつ）れ果てた血の気のない顔を上げ、伜

の長作の顔に見入りながら言うのであった。
「俺はどうでもいいげっとも、長作あ?……」
「長作氏は、ほしがって、ほしがって。――一台の機械で、五人分も仕事が出来んのだから、うんとほしがっていんのだげっとも、やはり、爺つぁあまさの遠慮で……」と操三郎は、横から、少し渋味のある声で饒舌(しゃべ)りたてた。

長作等には、実際、稲扱き機械は強い誘惑を持たずにはいなかった。一台の機械に、二人の人間がついていれば、五人分の仕事は楽に出来る。誰にだって使える機械だし、それに、米も別段いたまないし、減りも

しない。その上、仕事のあがりが大変に綺麗に行く。

――こういう条件を聞いては、長作等はたまらなかった。稼手（かせぎて）が少なくて、仕事に追い立てられている長作である。口から手が出るような思いがするのも、決して無理からぬことであった。

「ほんじゃ、長作せえいいごったら、取り換（げ）えでくんつえ。」と言って、平三爺は、痩せこけた顔を枕に押し当てた。

「なあ、長作氏。ほんでは、俺んどこにあるうぢの、一番にいい機械寄越しから……」

「ほんでも爺つあん。爺つあんが、なによりの楽しみ

にしていだ山茶花。——俺、なあに、手で扱いだって扱げんのだから。——せっかく、爺つあんが楽しみにしていだ山茶花……」と長作は、吐切れとぎれに言った。

「いいがら、いいがら、俺がこうして病気して、仕事にも追われでんだし、取り換えでもらえ。——俺、山茶花など、どうでもいいがら。」

　それを聞くと長作は寂しかった。父親の気持ちを汲むと、彼はむしろ、胸を嚙まれる思いがした。

「爺つあんが大切にして育てだ山茶花だもの。今まで、どこから売れって言われでも、売んねえでだ山茶花だ

もの……」

「いいがら長作、取り換(げ)えでもらえ。俺は、本当になんにもいらねえ。こんなに大切にされで、俺、なんにもいらねえ。俺、金でも溜めでいで、その機械買ってやれんのだらえいげっとも……山茶花など！　それより、汝等(にしら)、なんでも楽出来れば。――俺、こんなに大切にされで……」

　涙もろくなった平三爺の眼からは、また涙が流れた。長作は、もう何も言わなかった。が、眼頭(めがしら)が熱く潤(うる)んで来るのを覚えた。

　彼等は、平三爺にしろ長作にしろ、もちろん、この

山茶花を手放したくはなかった。併し、だからと言ってこれを拒絶して、手扱(てこ)きを使い続ける気にもなれなかった。

「俺は、もう、これきりの人間だ。山茶花など！　それより、汝等(にしら)せえ、幸福(しあわせ)で……」

平三爺は、もう一度こう言って、涙に濡れた顔を、とくと枕に押しあてた。

――昭和二年（一九二七年）『文章倶楽部』七月号――

底本：「佐左木俊郎選集」英宝社
　　　１９８４（昭和59）年４月14日初版発行
初出：「文章倶楽部」
　　　１９２７（昭和２）年７月号
入力：田中敬三
校正：小林繁雄
２００７年７月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。